

一、次の①～⑤の文の――線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 班別行動の計画には不備があり、サイコウの余地がある。
- ② 新たに国宝に指定された仏像を、いち早くハイカンする。
- ③ 最近、年長者に対するレイセツが軽んじられているような気がする。
- ④ 旅行の実施が危ぶまれるほどの悪天候だったが、朝にはコウテンした。
- ⑤ 修学旅行の文集を印刷する前に、ゴシヨクを見つけて訂正した。

二、次の①～⑤の文の~~~~線部は、心の動きに関わる表現になっています。例にならって、
にあてはまる言葉をひらがなで答えなさい。ただし、
には「」内の文字数のひらがなが入るものとします。

例
あまりに騒がしかったので、先生は~~~~のごとく怒り始めた。〔三〕 （答）れっか

- ① 貸していた本を汚して返されたので、彼は額に~~~~を立てて怒っていた。〔四〕
- ② みんなから痛いところを突かれてしまい、~~~~も出なかった。〔四〕
- ③ 展覧会のために~~~~を注いで制作した作品が、金賞に選ばれた。〔四〕
- ④ チームに頼りになるエースがいるので、~~~~に乗った気持ちで試合に臨んだ。〔四〕
- ⑤ 長年連れ添った祖父と祖母は、いつ見ても仲~~~~の様子でいる。〔五〕

三、次の文章は、原田マハの『生きるぼくら』の一節である。将来に希望を見出せなくなった人生は、父方の祖母が住む蓼科を訪れた。人生はそこで、祖母と暮らしているつぼみと出会う。彼女は、人生が幼いころに離ればなれになった父（新多）と再婚した相手の娘だった。問題文は、父が亡くなる直前の様子を祖母が回想する場面から始まっている。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

去年の秋、ばあちゃんの息子、つまり人生の父が病氣になって帰ってきた。

もはや完治することはないと、人生の父は悟っていたようだ。できるだけ蓼科の実家で過ごしたいとの願いを聞き入れて、担当医は数日間の外泊許可を出してくれた。

父は、残りわずかな日々を、なつかしい蓼科で過ごすことにこだわった。

いま、人生が寝起きをしている東向きの部屋に布団を敷き、縁側の向こうに広がる庭の風景、その彼方の八ヶ岳の青い峰を、横たわったまま、A 日がな一日眺めていた。

十月下旬、刈り入れの時期。「自然の田んぼ」のほとりに、父の姿があった。ばあちゃんは、村内の人々に手伝ってもらって、せっせと稲を刈っていた。けれど、いっさい機械を使わない刈り入れは、肩にも腰にも背中にも、相当な負担がかかる。いったん下を向いて始めると、なかなか顔を起こせない。全神経は右手に持ったカマと左手につかんだ稲穂に集中している。従って、ばあちゃんは、そのとき、自分の息子が刈り入れを見にきているなどと、まったく気づくことはなかった。

「あ。そのときのこと、あたし、ママから聞いたよ」

ばあちゃんの思い出語りに、つぼみが口をはさんだ。

「新多パパが一時退院してこの家に帰ってくるときには、ママが仕事を休んで介護にきてたんだよね。田んぼの刈り入れをパパと一緒に見にいったって、東京に帰ってきてから話してくれたんだ」

「そうだったかしらね。じゃあ、息子はあなたのお母さんに、ずいぶんお世話になったのね」

ばあちゃんは、やはりつぼみの母のことは覚えていないようだった。

「自分は来なかったわけ？」

人生がつぼみに訊くと、

①「あたしは……来なかったよ」

少し言い濃んで、つぼみが答えた。

「だって、なんだか苦しかったんだもん……病氣のパパに会うのが」

つぼみは、病気ですっかり生気を失った父を見るのが怖かったという。

(1-3)

結局、彼女が父を見舞ったのは、入院中、たった一度だけだった。

「だから、なんだか、パパがいなくなったっていうのが、いまだに信じられない気がする。いまでも、この家のどこかに隠れてるみたいな気がするよ」

膝を抱えて、つぼみはつぶやいた。どうやら、十数年まえに父と別れたつきりになってしまっていた実の息子である人生よりも、彼女のほうがずっと父の存在を身近に感じているようだった。

ばあちゃんがせっせと刈り入れする様子を見た人生の父は、その日、ばあちゃんが帰ってくるのを待ち構えていたかのように、布団の上に正座して迎えてくれた。

おかえり、母さん。今日、刈り入れ見にいったんだよ。おれが来てるの、全然気づいてなかったみたいだけだ。

母さん、ずいぶん一生けんめいだったね。ずっと眺めているうちに、人間の顔ってこんなふうになるんだって、気がついたよ。

一生けんめいに、何かひとつのことに打ちこむ人間は、こんなふうに輝くんだって。おれが東京の大学に行ってた頃からずっと、毎年、新米を送ってくれたね。

いつのまにかそれがあたりまえのようになってしまった。

けれど、おれたちが毎日食べているご飯が、どうしてあんなにおいしいのか、今日、あらためてよくわかったよ。

母さんがあんなふうに輝いて作ったお米が、おいしくないはずないもんな。一年中氣にかけて、手塩にかけて作ったお米。そのお米を食べて、おれたちも、いつのまにか輝いて生きてきたんだな。

② 母さん。おれ、なんだかすごく誇らしく思う。母さんの息子だったことを。その翌日、人生の父は再入院し、それっきり、この家に戻ることはなかった。

ばあちゃんの話を聞きながら、③ 人生は、いつしかつぼみと同じように膝を抱えて向かい合っていた。布団の上に正座して、いまにも消え入りそうな命の灯火をほのかに輝かせながら、ばあちゃんに語りかける父に。

それは、幼い頃、キャッチボールの相手をしてくれたり、母とともににぎやかに食卓を囲んだりした記憶の中の父とは、ずいぶん違っていた。

瘦せた手足に力はなく、すっかり年老いてしまったかのように見える父。幼い息子を軽々と肩に乗せるような、生命の輝きはもうどこにもない。

(1-4)

それでも、父には、きっと、ばあちゃんに対する溢れんばかりの思いがあったはずだ。輝きながら米作りをする母親への、心からの尊敬の気持ちだ。

おれ、なんだかすごく誇らしく思う。母さんの息子だったことを。

父がばあちゃんに言ったというそのひと言が、人生の胸の奥深く、まっすぐに響いてきた。

父は、そのひと言こそを、自分の人生のいちばん最後に、ばあちゃんに伝えたかったに違いない。

「ほんとうにね、不思議なくらいおなじだったわ。夫も亡くなる直前に、いままで言ってくれたこともないようなひと言を残してくれたし、新多だって、そんなこと、一度だって面と向かって言ったことはなかったのよ」

思い出し笑いをして、ばあちゃんは言った。なつかしさに、目をほんのりとうるませながら。

「まったく、あの人たちときたら……どうして逝ってしまう直前になって、嬉しいことばかり言い残してくれたのかしらね」

④ 人生の隣で、ぐすつとはなをすすする音がした。そつと横を向くと、両膝を抱え、その上にあごを

載せて、つぼみがばあちゃんをみつめている。手の甲でしきりに目をこすっている。その様子は、物語に聴き入る無垢な少女そのものだった。

自分の中にも湿ったものがこみ上げてきて、不覚にも、目頭が熱くなった。

なんだよ、おれ。どうしちゃったんだろ。

なんだか、こつちへ来て、妙に涙もろくなっちゃったな。そういう性格になっちゃったのかな。

「そんなこんなだね。あの田んぼは、私にとつては大切な思い出の場所……宝物なのよ。それに、嬉しいことに、どうやら私はあそこにいると輝くらしいしね」

茶目つ氣たつぷりに、ばあちゃんが微笑んだ。つぼみは、ごしごしと目をこすると、ばあちゃんに言った。

「そんなに大切な場所なのに、どうして今年は米作りができない、なんて言うの？」

ばあちゃんは、静かな口調で答えた。

「だからこそ、なのよ。宝物だからこそ、もういいかな、つて思ったの」

農作業をして輝くばあちゃんを見守ってくれたふたりはもういない。だからこそ、思い出の中に宝物をそつとしまっておきたい。ばあちゃんは、そう考えたという。

「ほんの一反限りの田んぼだけど、そこでお米を作り続けることができたのは、多くの人たちに支えられてきたからなの」

毎年、畦塗りの季節になると、近所の若い衆——といっても四十代、五十代——が集まってきて、今年もまたやるのかい、しょうがないなあ、と言いながら手を貸してくれる。田植えも、刈り入れも、彼らの手助けなしにはとてもできない。

彼らは皆、それぞれに仕事があり、田植えや刈り入れの時期は、まさしく猫の手も借りた**B**ほど忙を極める。それなのに、ばあちゃんのことを気に留めて、きつい作業につき合ってくれるのだ。

「ほんとうにありがたいと思っているの。それなのに、私、その人たちの誰ひとり……誰が誰なんだかよくわからないのよ」

見守ってくれた夫や息子がいなくなってしまったのもさびしい。けれど、それと同じくらい悲しいのは、そんなにまでして手伝ってくれている人たちのことを、ばあちゃんは認識できないのだ。

自分が今年も米作りをすると言えば、きっと彼らはまた手伝ってくれるに違いない。

そしてばあちゃんは、そんな人々の顔も名前もわからないまま、彼らの好意に甘えなければならぬ。それが何より心苦しい。

人さまのお世話になるのに、それじゃあんまり失礼だし、きっとその人たちも、こんな自分に呆れてしまうと思う。だから、そうなるまえに、今年の米作りはあきらめたほうがいい。

それがばあちゃんの結論だった。

人生は、少なからず驚いた。

ばあちゃんが、毎日会う相手であつても忘れてしまうことに、人生はもはや慣れつつあったが、ばあちゃん自身はそのことを気に病んでいるのだ。

誰も彼も忘れてしまう病氣。ばあちゃんは、自分でそうわかっている。ただ漫然と忘れてしまったわけではないのだ。

そう氣づいたとき、人生は、ばあちゃんの孤独を初めて理解した。

知らない人に囲まれて不安だろう。そして、知らない人たちに親切にされることは、ばあちゃんにとつて、ただただ心苦しいことなのだろう。

覚えているのは、もうこの世にいない人ばかり。

ばあちゃんは、思い出の中に、ひとりぼつちで閉じこめられてしまっているのだ。

「ばあちゃん。おれ……」

呼びかけながら、人生は、思わず正座した。そして、心の中に封印していた言葉を口にした。

「おれがいるよ。……おれが、手伝うよ」

ばあちゃんは、一瞬、息を止めて人生に目を向けた。

が、ばあちゃんよりも早く反応したのは、隣で膝を抱えていたつぼみだった。

「ちよつとお。手伝うって最初に言ったの、あたしなだけど」

早速つかかっていた。こういう場合、もちろん受けて立つのが、最近の人生だった。

「別にいいだろ、人手は多いほうがいいんだから。そっちも手伝えばいいじゃん」

「だからあ。そういうときは、『おれが』じゃなくて、『おれも』でしょ。『おれも一緒に手伝う』って言いなよ」

「いちいちうっせえな」

「そっちこそ」

ふたりがにぎやかに言い合う様子をみつめて、ばあちゃんは、「あらあら、また始まったわね」と楽しげに言った。

「この調子じゃ、相当にぎやかな米作りになりそうね」

人生とつぼみ、ふたりは同時にばあちゃんを見た。が、人生が何か言うより先に、つぼみが「いいの？」と訊いた。

「いいの、おばあちゃん？ あたしたち、手伝わせてもらえるの？」

ばあちゃんは、深い眼差しでふたりをじっとみつめた。そして、しみじみとした声で「ありがとう」と言った。

そう礼を述べてから、「でもね……」と言いかけた。その途端、「言うな」と人生がさえぎった。

『でも』って言うなよ、ばあちゃん。おれたち、そのさきは聞かないから」

でも大変よとか、でもきつと無理よとか、ばあちゃんは言うつもりなんだ。そんな言葉は聞きたくない。

人生の中で、やってみたいという気持ちがあふつふつと湧き上がっていた。

何がなんでも、手伝いたい。自分の手で、作ってみたい。ばあちゃんの宝物の田んぼ、米作りを。

「おれたち、もう決めたから。ばあちゃんがどう言おうと、手伝うよ」

きっぱりと言った。

⑤ 隣のつぼみは、目を丸くして人生をみつめていたが、やがてばあちゃんのほうへ向き直ると、居住まいを正した。そして、やはりはつきりと言った。

「おばあちゃん。あたしたち、あきらめません。最後まで、絶対にやり抜きます。だから、手伝わせて。」

お願いします」

おかっぱ頭を揺らして、つぼみが頭を下げた。人生も、それに付られて不器用にお辞儀をした。

ふたりに頭を下げられて、「あら、あら」とばあちゃんは、困ったような笑顔になった。そして、もう一度、ありがとう、とつぶやいた。

—— 原田マハ『生きるぼくら』による

(問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた)

問一 線部A「日がな一日」、B「猫の手も借りたいほど」について、これらの言葉を本文中と同じ意味で使っている文として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A「日がな一日」

ア 夏休みの宿題が終わらず、日がな一日を暮らすことになってしまった。

イ 今年の夏は、日がな一日暑い昼が続いている毎日だった。

ウ 朝から雨が降っていたので、家の中で退屈な日がな一日を送った。

エ 去年遠くの町に引っ越しをした友達から、日がな一日近況を知らせる手紙が届いた。

オ 台風で急に学校が休みになったので、日がな一日読書をして過ごした。

B「猫の手も借りたいほど」

ア 日焼けしすぎて背中が剥けてしまったので、猫の手も借りたいほどだ。

イ 難しい算数の問題がなかなか解けないので、猫の手も借りたいほどだ。

ウ 今週中に提出しなくてはいけない宿題が山積みで、猫の手も借りたいほどだ。

エ 試合に負けそうで精神的にも追い詰められ、猫の手も借りたいほどだ。

オ いつもの自慢話を叔父が延々と続けているときは、猫の手も借りたいほどだ。

問二——線部①に「あたしは……来なかったよ」とありますが、このときのつぼみの心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 祖母がいる前で、祖母にとっては息子である父の介護をしなかったことを告白しなくてはならない状況に追い込まれ、申し訳なさを感^{かん}じている。

イ 本来ならば娘として、母とともに父の介護をすべきだったにもかかわらず、父を避け続けていたことで、自己嫌悪に陥^{おちい}っている。

ウ 自分が父の介護を手伝わなかったことを人生に責められている気分になり、たった一度しか見舞^{まゐ}わなかったことに、後悔の念を抱^{いだ}いている。

エ 母とともに父の介護をしなかったことに引け目を感じながらも、病気で苦しむ父の姿を見るに忍^{しの}びなかった、当時のつらい気持ち^{きもち}がよみがえっている。

オ 病に冒^{おか}されている父のことを覚えている祖母が、看病をしに来ていた母のことをすっかり忘れてしまっていることで、悲しい気分になっている。

問三——線部②に「母さん。おれ、なんだかすごく誇^ほらしく思う。母さんの息子だったことを」とありますが、このときの父の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 初めて目の当たりにした、米作りに対して熱心に取り組んでいる母の姿と、毎年送られてきた米の深いおいしさが重なり、今の自分があるのは母の米のおかげだと、ありがたく思っている。

イ おいしい米作りにかける母の思いを感じ取ったことで、一つのことに真剣^{しんけん}に取り組む生き方の価値を再発見し、残された時を母の作ってくれた米を食べながら生きようと決意している。

ウ 米作りに打ちこむ母の姿を見て、その米を毎年送ってくれることで母が自分を見守ってくれていたことに気づき、そのおかげで今強く生きられているのだと感じ、嬉^{うれ}しく思っている。

エ 家族のことも忘れるほど米作りに身も心も捧^{ささ}げている母の姿を見て、自分が食べてきた母特製の米のおいしさの秘密を垣間^{かひま}見た思いがして、あらためて母の偉大^{いだい}さをかみしめている。

オ 一心に米作りに取り組む母の姿に心を動かされたことによって、そのように作られた米を毎年食べてきた自分のことまでも前向きに捉^{とら}えられるようになり、深い感謝の念を覚えている。

(1-9)

問四——線部③に「人生は、いつしかつぼみと同じように膝を抱えて向かい合っていた」とありますが、このときの人生の様子について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分とつぼみのために、彼らの知らない父の最後の姿を伝えようとしてくれている祖母に対して、その一言一句も聞き漏^もらさないようにしている。

イ 父とのやりとりを回想する祖母の話^{はなし}を聞いているうちにその話の中に入り込んでいき、そこにいるはずのない父が眼前に^{まへ}にいるかのように感じられている。

ウ 祖母の話^{はなし}を聞いていると、もう父はこの世にいないのだという現実を受け入れざるを得なくなり、少しずつ悲しみが押し寄せている。

エ 祖母の話に集中しているうちに、あたかも父が話しかけてくるように感じられ、祖母に対する父の思いが伝わってきたように感じられている。

オ 父との最後の会話を聞いている中で、亡くなった父親が急に身近に感じられてきて、幼いつぼみが病気の父親に会^あうのが怖^{こわ}かったという気持ちがわかりつつある。

問五——線部④に「人生の隣で、ぐすつとはなをすすする音がした」とありますが、このときのつぼみはどのような気持ちを抱^{かか}いていると考えられますか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 祖母にとって大切な存在であつた、父や祖父との最後の思い出を語る祖母の気持ちを慮^{おもひ}り、いたたまれない気持ちにおしつぶされそうになっている。

イ 父と祖父が、それぞれ亡くなる直前になつて祖母への感謝の気持ちを伝えたという話を聞いて、二人の優^{やさ}しさに強く心を動かされている。

ウ 父や祖父との最後のやりとりを祖母から聞いているうちに、人の死に触^ふれることがどんなにづらいことかを改めて実感している。

エ 父や祖父へ思いをはせている祖母の話に心を打たれるとともに、知らないはずの亡くなる直前の父の姿も目に浮かび、感極^{きんごく}まっている。

オ 父や祖父とのかけがえのない瞬間^{しゅんかん}を共有できた祖母とは違い、自分は父との最後の時間を過ごすことができなかったことを心底悔^くやんでいる。

(1-10)

オ　何となく蓼科たてしなにやってきた人生一人だけでは、厳しい農作業など続くわけがないのに、米作りをすると言言した彼にあきれつつも、せめて自分一人だけでも農作業を手伝うことで、祖母に恩返しをしようと決意を固めている。

問八 〓線部に「ばあちゃんは、思い出の中に、ひとりぼっちで閉じこめられてしまっているのだ」とありますが、このとき、ばあちゃんはどういうことを思っていると人生は感じていますか。文章全体をふまえて、八十字以内で説明しなさい。

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。



80 60 40 20

四、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中島敦（一九〇九～一九四二）の著作に『文字禍』（一九四二）という短篇があります。古代アツ

シリアの伝説を基に書かれた小説で、題名どおり、文字が人に禍いをもたらす話です。人間は文字を

発明したことによって身体に変調をきたし始め、以前に比べて能力が衰える一方だったというのです。

確かに、文字ができたことで記憶力が衰退したであろうことは、^① 私たちにも予想できることですが、

ここに登場する老博士は、もっと顕著な影響があった例として「文字を覚えて以来、咳が出始めたという者、くしゃみが出るようになって困るという者、しゃっくりが度々出るようになった者、下痢をするようになった者なども、かなりの数に上る」と記録しています。A 例へんに、文字を覚える以前に比べて、職人は腕が鈍り、戦士は臆病になり、獵師は獅子を射そこなうことが多くなったそうです。単

に記憶の問題だけでなく、身体そのものや人々の行動にも大きな変化が起きていたことを、古い伝説が示唆しているのです。文字とは、人間の精神的な営みを、固定して保存する発明です。文字に封じ込まれた事柄は、誰かに読まれることで読者の心にイメージとしてよみがえります。本棚に並んでいる書物

には、それを読みさえすれば、先人たちの精神遺産をいつでもよみがえらせる力があつたのです。

現代でも、日本の書店に陳列されている書籍は、単なる商品としての物である以上に大切にされています。本が簡単に廃棄されたり焼却されてしまうことには多くの人が抵抗を感じるでしょう。現在も文字の印刷されている紙は特別なものであつて、新聞やピラもゴミとして廃棄されるのではなく、大切に収集され、^② 処分するにしても一応は供養塔と意味づけられた焼却炉で燃やしている国もあるようです。

日本で新聞や雑誌を資源ゴミとして他のゴミと分別するのは、もちろん再生紙として利用するためですが、^③ 文字の書かれた紙を処分する際には、何かを供養するような畏敬の念が作用しているような気がします。

そして、書店に入るとなぜか落ち着かないと感じる人々が現代でも、存在します。圧倒的な人間精神の不思議さを醸し出している書物が大量に備えられている空間にいと、人はその空間の質的な違いを感じ取り、『文字禍』に描かれているように身体が反応してしまうのでしょうか。その感受性は五感には分けられません。

聖なる空間の神々しさや清冽さ、敷居を跨ぐときの慄きや不安は、^④ 身体が感じ取った周囲の情報に対する反応ですから、五感には分類されにくいのですが、しかしこれもまた或るひとつの、内臓が反

応する感覚です。そしてこの感受性は、誰もがもっているのかもしれませんが、なかなかそれを客観的に検証することはできません。きわめて主観的だからです。

このように、私たちには、^B えもいわれぬ感覚というものがあります。何かを感じていても、それを客観的に表明しにくい感じですが、そもそも五感の性質においても、本当はそれぞれが感じたことを客観的に検証し合うことなどできないものです。自分を抜け出して、他人の感覚を体験させてもらうことは不可能です。ただ、ほんの少し似たような感覚を追体験できるだけのこと。それを追体験できるのは、

^④ 言葉などで表現されることによって、ある感覚が共有され、流通する客観性をもち得た場合、だけなのです。

とはいえ私たちは、言葉以前の、あるいは言葉の外の体験として、何かを感じることがあります。言葉にできない感動というものに、私たちは出会うことがあります。言葉の代わりに、涙や、震えや、固く結んだ拳として、その感動は身体反応として表れます。しかし、この言葉にならない感動もまた、それでもやはり表現し得る、という言葉の作用があるのです。それは、* ヴェールとしての言葉です。

ある物体に薄いヴェールをかけると、それは見えなくなります。ヴェールをかけると、見えていたものが見えなくなるのです。一方、見えなかったものにヴェールをかけると、見えなかったものがそこに在ることが分かるようになります。今まで見えなかったものが、ヴェールに覆われることで、そこに何が在ることが分かる、見えなかったものの存在が明らかになるのです。これがヴェールの作用です。

ヴェールは、可視の事物を隠し、不可視のものの在りかを示すのです。

このヴェールの二様の働きは、言葉にもあります。ある見えないものに名前を付けると、それを具体的に存在する対象として考えることができます。ガスは目に見えませんが、ガス臭い！と気づけば、何か行動を起こすことができます。「神」や「靈魂」のように在るか無いか分からないけれども、一応の名が付いていれば、それらについて議論することはできます。一方、たとえば「障害者」や「男性」という言葉で一括りにされる人々には、さまざまな違いがあるにもかかわらず、ひとつの言葉でレッテルを貼られて対応されます。種々多様な世界に、言葉というヴェールをふわりとかけると、なんとなく一塊にして捉えられることになるのです。

言葉は、一面では何かを説明する記号です。でも、その言葉によって伝わることは限られ、それを理解する者が限られている場合もあります。使用している言語の違いや知識量の差もあるから、言葉ですべてが伝わるわけがないのです。そして、たとえ同じ言語であっても、また辞書的な意味は十分に理

解できても、それでも何を言いたいのかが皆目、分からないこともあります。それらは時として、秘密の言葉つまり暗号になるのです。

暗号とは、特定の共同体内でしか通じない表現です。分かる人だけに伝わればいい、分かってほしい人にだけ分かってもらえればいい。そういう伝え方もあるのです。ある言葉を受け取って、それを聴いた人の中に広がるイメージはひとつではありません。ごく少ない者たちだけに見える光景があるのです。皆には通じない性質を利用して、状況によってはあえて分からないように伝えなければならない場合に使われます。外国語がそのように作用することもあり得ます。

たとえば、もし「おにば」と聴こえたら、皆さんは、どう文字変換しますか。「鬼場」とか「鬼婆」でしょうか。これは、フランス語で「ou y ba」、「一緒に行こう」という意味です。もし誰かが「おにば」と囁いたら、その言葉で行動を起こす人と、鬼の映像を思い浮かべたまま訳が分からない人に分かれるでしょう。「おにば」という言葉は、その場からフランス語の分かる人だけを連れていこうとするときに、使える暗号になるのです。同様に、外国人の中で日本語を使うと、ほとんど知られていない日本語は暗号として機能します。

このような場面だけでなく、特殊用語で展開される専門家同士の議論や象徴詩は、分かる人だけに分かれればいいとされている言葉に満ちています。あるいは⑤忌み言葉や禁句もまた、ズバリ言い切ることが躊躇われる現象に際して使われる表現です。

こうして、明解にすることは逆の、いわば闇としての言葉が必要とされるのはなぜでしょうか。もし、私たちを取り巻くこの世界に向けて自らの感覚を全開させたなら、私たちの精神と身体とは砕け散ってしまうかもしれない、そんなふうに考えるとき、闇としての言葉が必要となるのです。なぜなら、そのとき私たちが受け取る刺激、情報の総量は、ひとりの人間では決して処理し切れないほど膨大な量であるに違いないからです。そういうとき、私たちの五感、それらを制御し、制限する役割を果たすフィルターであるかもしれないのです。

このような闇としての感覚器官という考え方の根底には、私たちは世界から何かを受け取ろうとして感覚器官を身体に具えているのではなく、むしろ逆に、私たちは世界から感覚を受け取りすぎないようにするために感覚器官を有しているのだ、という見方があります。身体感覚器官がいわば防壁となつて、爆発的な外からの刺激の流入を制御しているのかもしれないのです。眩しすぎるからサングラスをするように、感受しすぎることを避けるためにこそ目があるのかもしれないという仮説です。

(1-15)

これは、五感のひとつひとつを検証してきた*前章までの考察とは、逆向きの思考です。つまり私たちは、目や鼻や口や耳や皮膚という器官を活用して世界を知ろうとしているのではなく、むしろ、身体を防壁として、膨大な刺激の流入を縮減することで知覚可能となる情報を受け止めているとも考えられるのです。

⑥ヴェールとしての言葉のように、身体感覚器官もまた、ヴェールとして作用しているのかもしれない。時には、言葉は目の邪魔にもなります。感覚器官はセンサーであるだけでなく、フィルターでもあるかもしれないのです。

——加藤博子『五感の哲学 人生を豊かに生き切るために』による

(問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた)

(注) *1 ヴェール……薄い布。「ベール」とも書く。

*2 前章までの考察……筆者は、本文より前の部分で「味覚」「嗅覚」「触覚」「聴覚」「視覚」の五感についてそれぞれ考察している。

(1-16)

問一 ——— 線部A「挙げ句に」、B「えもいわれぬ」について、これらの言葉を本文中と同じ意味で使っている文として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A「挙げ句に」

ア 友人が蜂に刺された。挙げ句に、今年は蜂が大量発生しているらしい。

イ テストでよい成績をとった。挙げ句に、先生からお褒めの言葉をいただいた。

ウ 黒板に書かれた問題は難しかった。挙げ句に、クラスの誰にも解ける気配はない。

エ 口うるさい親戚のおばさんがやってくる。挙げ句に、明日には帰ってくれるそうだ。

オ 台風のせいで試合が延期になった。挙げ句に、試合会場が遠くの競技場に変更になった。

B「えもいわれぬ」

ア 裏山に僕らだけの秘密基地があることは、他人にはえもいわれぬ秘密だ。

イ 遠く離れた馬の群れが、えもいわれぬ精度でしつかり見える。

ウ 既に持っている本をプレゼントされた彼は、えもいわれぬ表情を浮かべた。

エ スカイツリーが世界一高い塔であることは、えもいわれぬ事実だ。

オ 人から借りたものをずっと返さないのは、えもいわれぬ感覚だ。

(1-17)

問三 ——— 線部②に「処分するにしても一応は供養塔と意味づけられた焼却炉で燃やしている」とありますが、この行動の背景にある考え方について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 新聞やビラには現世の人々の日常が色濃く残されており、一般の書籍以上の価値を持つため、畏敬の念を持って接する必要がある。

イ 文字が印刷された紙という点では共通しているが、新聞やビラは書籍に比べ、恒久的に保存しておく価値は低いと言わざるを得ない。

ウ どんな文字にも、人間の精神的な営みを保存するだけの潜在的な力があり、それを印刷した紙の処分は特別な方法で行うべきだ。

エ 紙資源という点では書籍と何ら変わる所のない新聞やビラの価値を認め、ただ廃棄・処分するだけではない有効な活用法を考えるべきだ。

オ 古代人がその精神的な営みを保存しようとした遺産とも言える紙をただ単に燃やしてしまうことは、先祖の思いを無にする罪深い行為である。

問四 本文中の にあてはまる言葉として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア もっとも、確かに

イ それでも、やはり

ウ なるほど、しかし

エ はたして、それは

オ いよいよ、やっと

問五 ——— 線部③に「身体を感じ取った周囲の情報に対する反応」とありますが、その具体例として挙げられているものを、これより後の本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

(1-18)

氏名

番
聖光学院中学校

二〇一七年度

第一回 入学試験 解答用紙 国語

【注意】 解答はすべてこの解答用紙に記入すること。

得点合計

一、

①

②

③

④

⑤

二、

①

②

③

④

⑤

④

⑤

三、 問一

A

B

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問四

問八

80 60 40 20

四、 問一

A

B

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

40 20

問八

40 20